

途中粗粒玄武岩や根室層をみながらシキウス部落に達するが交通の便はない。ここから海崖の続く磯沿いにノツカマップ部落までの間にノツカマップ層がよく観察されるが凝灰角礫岩など火砕岩質を主に礫岩・砂岩などが挟在し同層が露われる始終両部落では *Inoceramus schimidti* Мич. I. cfr. *shikotanensis* MAT. が比較的多産する。

納沙布へ 半島を東走するバスで45分 いま日本の最東端の納沙布岬(東経145°49'20'')に旅足をのびしてみよう。市街を出るとまもなく前方の友知の岬には台地を切った低位の段丘がみえる。左手のオンネ沼を過ぎるとやがて台地にのり沖根婦(オキネツプ)にくると道路切り割りに根室層の珪質の凝灰岩もみえる。漁村が並ぶ右窓から左手をみやると平坦な牧草原が遠く地平線のかなたまで続く。

納沙布岬に立てば眼下は粗粒玄武岩の海崖右手を南に追えばモンゾニ岩質など各種岩が露われ左手の展望台側には根室層とその海食洞もみえる。

展望台から東千島を望めば行きかう昆布採取船や3km余の瑤瑤瑠(ゴウウマイ)海峡を隔てた豆粒の貝殻島その先には低平な水晶島がかすみ国後島も水平線のかなたにあわく浮かぶ。

根室から風蓮湖へ (根室南部・厚床)

根室市からの帰路は根室湾岸を走る国道44号線をバスで厚床までの1時間余を楽しみたい。20分も走ると左手には根室半島基部を南北に切るように奥深い入江の温根沼(4.9km² 最深7m)が目に入る。

やがて東梅から右手木立ちの間から白鳥の湖(10月～4月 約1万羽)と知られる風蓮湖(52km² 最深11m)がみえる。同湖は延長20km 幅200m以下の縁に包まれた低い砂州で海を隔てる鹹湖で干潮には温根沼と同じく澤筋を描き湖水縁一帯や注入する蛇行の諸川下流部には一面に泥炭が形成されている。本湖は北国特有な灰色の水をたたえ荒涼寂漠な異彩ある風景は

「野付・風蓮道立公園」の名に価しよう。

(著者らは 北海道教育大学釧路分校・地学教室)

参考文献

藤原哲夫・三谷勝利(1959): 5万分の1地質図幅「納沙布」北海道立地下資源調査所
 藤原哲夫(1959): 北海道浜中地域の鉱床と生成活動について 岩鉱43-4
 長谷川潔・三谷勝利(1959): 5万分の1地質図幅「根室北部」北海道立地下資源調査所
 北海道地殻公害研究グループ(1967): 北海道に於ける特異地盤に対する地震対策に関する研究 第2篇 昭和41年度研究報告書(釧路関係)
 河合正虎(1956): 5万分の1地質図幅「昆布森」地質調査所
 三谷勝利・藤原哲夫・長谷川潔(1958): 5万分の1地質図幅「根室南部」北海道立地下資源調査所
 三谷勝利・石山昭三・小山内熙(1962): 「厚床および落石岬」北海道立地下資源調査所
 長浜春夫(1961): 5万分の1地質図幅「釧路」北海道開発庁
 長尾捨一(1961): 5万分の1地質図幅「床潭」北海道立地下資源調査所
 長尾捨一・石山昭三・吉田三郎(1966): 5万分の1地質図幅「霧多布」北海道開発庁
 岡崎由夫・長浜春夫(1965): 5万分の1地質図幅「尾幌」北海道開発庁
 岡崎由夫・佐藤茂・長浜春夫(1966): 5万分の1地質図幅「大栗毛」北海道開発庁
 岡崎由夫(1966): 釧路の地質 釧路叢書7巻 釧路市
 小山内熙・三谷勝利・松下勝秀(1961): 5万分の1地質図幅「厚岸」北海道開発庁
 佐々保雄(1953): 釧路炭田誌(地質の部)・日本石炭協会北海道支部
 佐々保雄(1957): 色丹列島の地質(要旨) 北海道地質要報34
 鈴木秀夫・野上道男・田淵洋(1964): 化石周氷河現象の観察 第四紀研究3-3
 高柳洋吉(1953): 釧路層の有孔虫化石群について 地質誌59-691
 植田良夫・青木謙一郎(1968): 根室半島のアルカリ岩のK-Ar年代 岩鉱59-6

学会掲示板

- ・日本地下水学会
- 1. 昭和46年6月26日(土)
- 2. 昭和46年度日本地下水学会総会および'71 IAH アジア地域会議国内シンポジウム
- 3. 東京教育大学理学部(東京都文京区大塚3-29-1) ☎(03) 946-2151
- 4. 日本地下水学会 '71 IAH アジア地域会議組織委員会 日本学術会議地質研連水文地質小委員会
- 5. 川崎市久本135 地質調査所水資源課内 日本地下水学会 ☎(044) 86-3171

・第5回「地学研究」全国大会

- 1. 昭和46年8月25日(木)～26日(金)
 - 2. 第5回「地学研究」全国大会
 - 3. 東京都台東区上野公園 国立科学博物館一号館講堂
 - 4. 日本鉱物趣味の会・国立科学博物館地学同好会(共催)
 - 5. 京都市上京区丸九出水西入 日本鉱物趣味の会 ☎(075) 441-3280
- [注] 1. 開催年月 2. 会合名 3. 会場 4. 主催者
 5. 連絡先(掲載順位は原稿到着順)

地学と切手



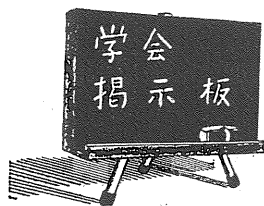
フライベルグ 鉱山学校
200年記念切手 P. Q.

南ドイツのフライベルグは古くから鉱工業がさかんで 1765年世界最初に創設されたフライベルグ鉱山学校 (Freiberg Bergakademie)はウエルナー(A. G. WERNER)の水成論の時代には 世界地質学のひとつの焦点であった。ウエルナーは中央ヨーロッパ・パリスカン北部をなすサクソニー地方で 現在のパリスカン造山帯中核部の花崗岩を地球の初源海洋から海底に化学的に沈澱したものとみなし ハットン (J. HUTTON) の火成説と対立した。この鉱山学校は今も健在で 第2次大戦中はメーネルト (MEHNERT) らが詳細なシヴァルツヴァルトの岩石学的な研究を行ない ミグマタイトの研究の古典的な地域のひとつになっている。

この切手は4枚1組で1965年11月13日に発行された。10ペニヒの精錬炉 15ペニヒの採鉱運搬の図 20ペニヒの淡紅銀鉱 Proustite (Ag_3AsS_3) 25ペニヒの硫黄結晶の図からなっている。この絵からみると昔から乾式法で鉛あるいは銀に吸収させ 灰吹法にかけて精製する方法がとられていたらしい。しかし働いている人々の服装は何か中世を連想させそれが錬金術師のイメージと連なる。鉱山業そのものは 名実共に健全な錬金術であったわけだが 一方では魔法じみたいんちき臭い錬金術が暇をもてあました貴族の館や うす

暗い修道院の中でさかんに行なわれていた。こうした錬金術の世界でも 生産に直結していた部分は健全に発達し 近代工業化へ大きく貢献し また 新しい科学技術の発達に役立って来た。

錬金術の中では水銀がその様々な変態の故に重要視され それと結びついている硫黄も大切な気であるとされた。彼らは辰砂を焼いて水銀を分離すると銀と称し また水銀と他の金属とでアマルガムをとり 銀の量が増したと考えた。ここにとり上げられた硫黄と淡紅銀鉱は そのような錬金術と関連してとり上げられたわけではないのだろうが 錬金術師の普通のやり方で本当の銀をとり出すことの出来る鉱石である。淡紅銀鉱の赤の美しいものは「ルビー銀」とよばれ珍重されている。



・Asian Regional Conference, International Association of Hydrogeologists

1. 1971年8月18日(水) ~27日(金)
2. 国際水文地質学会アジア地域会議
3. 東京

1. 昭和46年8月24日(火)~29日(日)
2. 日本地学教育学会第25回全国大会
3. 東京都立教育研究所及び東京学芸大学
4. 日本地学教育学会
5. 東京都小金井市貫井北町 東京学芸大学地学教室内
日本地学教育学会 ☎(0432) 21-1741

4. 日本地下水学会
5. 川崎市久本135 地質調査所水資源課内
日本地下水学会 ☎(044) 86-3171 (代)

・International Summer School on Crystal Growth

1. 1971年6月21日(月)~7月20日(金)
2. 結晶成長国際夏の学校
3. オランダ ライデン市近郊
Leeuwenhorst Congresscenter, Noordwijkerhout
4. 同上組織委員会
5. Dr. P. Hartman, Geologisch en Mineralogisch Instituut der Rijksuniversiteit, Garenmarkt 1B, Leiden, The Netherlands

・日本地球化学会

1. 昭和46年10月15日(金)~17日(日)
2. 1971年地球化学討論会
3. 日本都市センター(東京都千代田区平河町)
4. 日本地球化学会・日本化学会 共催
5. 東京都杉並区高円寺北4-35-8
気象研究所化学研究部内 日本地球化学会事務局
☎(03) 337-1111 (内線75)

・日本岩石鉱物特殊技術研究会

1. 昭和46年7月28日(水)~30日(金)
2. 第14回研究発表会 金属 非金属 構造地質 耐火物等の薄片 研磨片の作成に関する講演会
3. 名古屋大学理学部地球科学教室 名古屋市中千種区不老町
4. 5. 日本岩石鉱物特殊技術研究会
川崎市久本135 地質調査所内 ☎(044) 86-3171

[注] 1. 開催年月 2. 会合名 3. 会場 4. 主催者
5. 連絡先(掲載順位は原稿到着順)